

# 森鷗外の長子於菟の片影

## ——台湾とのかかわりを中心に——

王 敏東

台湾科技大学 応用外国語学科

受付：平成28年5月5日／受理：平成29年1月6日

**要旨：**森於菟は森鷗外の長男で、「於菟」という名前の出典は『左伝』である。於菟は父と同様、医学の道に進み、東大医学部を卒業した。1922年に於菟がドイツに留学に行った数ヵ月後鷗外は亡くなった。帰国してからの於菟は大きな決定をした。それは東大を辞めて台北帝国大学に医学部の教授として赴任することだった。1936年に於菟は鷗外の遺物を台湾まで持ってきた。そのお蔭で、鷗外の遺物は、翌年全焼した東京の旧宅と共に焼失することはなかった。敗戦後、於菟は一時的な台湾大学での留用を経て、1947年に帰国した。於菟の元助手の協力を得て鷗外の遺物は1953年に日本へ帰ることとなった。於菟の台湾医学への貢献を感謝するため、台湾大学医学部は森於菟先生像を作った。

**キーワード：**鷗外の遺物、森於菟、台湾

### 1. はじめに

19世紀後期からの約1世紀は、日本をはじめとする東アジアにとって変動が激しい時代であった。台湾では、日清戦争の結果日本が台湾を統治することとなり、日本の医学を含む文化なども日本人とともに台湾に持ち込まれた。そのような時代に台湾との交流における安定した関係の構築に貢献した人物の探究は、その時代の理解に役立つと考えられる<sup>1)</sup>。

2011年に『影響臺灣醫學的日本人 日治時期各科之領導者』が出版された。これは、台湾における日本統治時代(1895～1945)<sup>2)</sup>の台湾の医学に影響を与えた、指導的立場の日本人医師についてまとめたものである。確実な資料に基づいた以上のことを言わないという著者の意図か、「彼らはどうしてこの台湾に来たのか」というような、内的な心情についてはほとんど触れられていないように思われる。

ところで、このような指導的立場の日本人医師に、森於菟という特別な人物がいた。「於菟」は

ドイツ名のOttoにあてたのみならず、中国典籍の『左伝』が出典(虎の意味)だ<sup>3)</sup>といい、於菟が生まれた年は寅歳だという理由の他、ドイツ名のOttoが「この子は独逸に行くとOtto Moriで歓迎せられる」との親の期待も含まれたからである<sup>4)</sup>。それにしても「於菟」は現代中国語として耳慣れない。この名前を付けたのは森於菟の父親である森林太郎(森鷗外)だという<sup>5)</sup>。

世間の目から見れば、明治時代に東京帝国大学医科大学を卒業して同大学の助教授(解剖学)をつとめ、のちに台北帝国大学の医学部部長(1939～と、1944～と2回)ともなっていた於菟は十分エリート<sup>6)</sup>であろうが、文豪と称された父親の方が遥かに名高いだろう。周知のように、鷗外は文学者であると同時に、軍医でもある。軍医としての森鷗外もすぐれた業績を残した。このような父親のもとで於菟はどう成長し、そしてどのような気持ちで故郷を背に台湾に赴いたか、実に興味深い。以下、現時点であつめられた限りの資料に基づき、於菟の心境について検討する。

## 2. 森一家

森家は、津和野藩代々の御典医の家柄である。鷗外は長男で、下に弟は2人、妹が1人いた。2度結婚した鷗外には、長男於菟を含め、5人の子供がいた。於菟の2人の妹と1人の弟はいずれも継母の志げと鷗外の間生まれた同父異母の兄弟である<sup>7)</sup>。於菟も2回女性と結婚した<sup>8)</sup>が、5人の子供はいずれも2回目の配偶者である富貴との子である。長男の真章は台北帝国大学医学部卒で、医学博士である。

## 3. 森鷗外

1862年に生まれた鷗外は7歳より漢学を学び、父親の静男についてオランダ文典も学んだ。1872年、鷗外が10歳になった年、父とともに上京、親戚西周邸に寄寓し、本郷にある進文学舎に通い、ドイツ語を学んだ。1874年に東京医学校予科に入学、1877年に東京大学医学部本科生となり、1881年に卒業した。同12月に陸軍省に入り、軍医となった。

本稿の内容と比較的深くかかわる出来事について略年表の形で以下に示す。

表1 森鷗外の略年表

1862年	鷗外誕生。
1869年	『左伝』などの漢籍を学ぶ
1872年	父親の静男に従い上京し、西周の家に寄寓。
1874年	東京医学校予科に入学。
1881年	7月東京大学医学部卒業。12月に陸軍に入り。
1884年	衛生学を学ぶためドイツ留学。
1888年	帰国し、陸軍軍医学舎教官となる。
1889年	3月9日に海軍中將赤松則良(男爵)の長女登志子と結婚。
1890年	9月に長男於菟が生まれ、10月に登志子と離婚。
1891年	医学博士号を取得。のちに観潮楼を建てることになる団子坂上の地を求めた。
1892年	祖父母、父母、弟と共に観潮楼に移住 <sup>9)</sup> 。
1893年	11月に陸軍一等軍医正、陸軍軍医学校校長。
1894年	8月に日清戦争が勃発、11月に中国の大連、旅順に赴く。
1895年	5月に戦争が終わり、台湾に上陸、台湾総督府陸軍局軍医部長となる。9月に東京へ戻り、陸軍軍医学校校長再任。
1899年	6月から2年10ヶ月の間、第十二師団軍医部長として小倉で勤務。
1902年	21歳年下の志げと再婚。
1922年	3月に於菟は茉莉と共にドイツへ、鷗外は7月歿。

## 4. 森於菟

『日本人名大辞典』によると、森於菟については「1890-1967 大正一昭和時代の解剖学者、随筆家。明治23年9月13日生まれ。森鷗外の長男。東京帝大助教授をへて台北帝大教授となり、解剖学を担当。のち東邦大医学部長などをつとめた。「解剖台に凭(よ)りて」「森鷗外」「父親としての鷗外」などの著作がある。昭和42年12月21日死去。77歳。東京出身。東京帝大卒。」という情報が提示されている。

於菟は1年あまりしか続かなかった鷗外の一回目の結婚で生まれた長男である。実は於菟が生まれて間もない頃、「十月初旬には父(鷗外、筆者注)は叔父達と本郷区駒込千駄木町五十七番地、当時太田の原という広場に面した借家に移って居た」という状況であったという<sup>10)</sup>。このような状況に置かれた於菟は「一時「天涯孤独」ともいふべき有様だった<sup>11)</sup>、さらに「母に分れた当時某家へ養子にとの話があった」が、「断乎として反対したのも曾祖母であった」という<sup>12)</sup>。乳母との生活を終えた於菟が鷗外と共に観潮楼で過ごすようになったのは数え年5歳頃のことであった<sup>13)</sup>。当時「祖母の手に支えられて椅子の上に立っている」於菟の写真が、鷗外が於菟を忘れないように戦地の鷗外に送られたという<sup>14)</sup>。於菟は1943年に発表した「観潮楼始末記」の冒頭に「観潮楼は私の魂の故郷である」と述べている。また、於菟の1955年の『父親としての森鷗外』(1969年版にも)と2010年の『老碌寸前』にも「観潮楼始末記」が収録されており、於菟が観潮楼にどれくらいの愛着や特別な感情を抱いていたかが感じられよう。戦後、於菟は弟の類と観潮楼にあった土地を文京区に提供し、現在そこに文京区立森鷗外記念館が建てられている。

ところが、前掲の森鷗外の略年表にも示したように、1902年に当時19歳の志げが十代の於菟の継母となり、観潮楼で同居するようになった。その後、於菟の同父異母の妹、弟も生まれてきた。志げは姑と対立していたばかりでなく<sup>15)</sup>、「継子(於菟、筆者注)を憎みその嫁をきらい、父(鷗外、

筆者注)の弟妹すべてを敵視する」<sup>16)</sup>という有様であった。於菟が結婚<sup>17)</sup>してから、1918年にはじめてドイツ語で論文を書く時にでも、鷗外に直してもらったため家(観潮楼)を訪れたら母(志げ)に嫌がられた<sup>18)</sup>。1922年春、於菟と茉莉がヨーロッパに行くこととなり、鷗外は東京駅まで見送りに行った<sup>19)</sup>が、7月に他界した<sup>20)</sup>。於菟が留学から帰った1924年に、観潮楼の主人は於菟となった。しかし、1925年に志げの「神経が苛立ち」、於菟等が「その近くにゐることさへその危険な妄想を激発させさうになつたため」、於菟一家は観潮楼を去ることになった<sup>21)</sup>。その後、観潮楼は次々と人に貸すようになっていた。1936年2月に於菟は妻子と共に台北帝国大学に赴任した<sup>22)</sup>。同年4月に志げが亡くなった<sup>23)</sup>。次いで1937年8月10日の夜半、当時台北市樺山町にあった於菟の宅に、観潮楼が全焼したという電報が届いた<sup>24)</sup>。

このように「非常に複雑」とされている森家<sup>25)</sup>を出て、遠く離れた台北帝国大学に行くという東大医学部解剖学教室小金井教授<sup>26)</sup>のすすめを引き受け<sup>27)</sup>たことは、「於菟にとっては約束されたも同様な東大医学部教授の地位の断念をも意味した」<sup>28)</sup>が、「少なくとも精神的には於菟にとって大きな解放を意味していただろう」とされており<sup>29)</sup>、実際於菟の妻の富貴は「於菟は天かける翼を得た鳥のように、また荒野に初めて鋤を入れる農夫のように、新しい天地へ」<sup>30)</sup>、さらに於菟自身も「私を訪れた台北帝国大学への転任は私にとって一種の救いであった」と述べている<sup>31)</sup>。於菟は台湾に来た時、台北帝国大学のために後半生を捧げるつもりで、台湾に骨を埋める覚悟だった<sup>32)</sup>。そのためであろうか、於菟は鷗外の遺物を数箱分も台湾まで一緒に持ってきた<sup>33)</sup>。

渡台後の於菟はある意味で比較的「一家の主」の姿で自分の意志で振る舞うことができた、と思われる。しかし、自分にとってかけがえのない存在である鷗外の遺物<sup>34)</sup>を、少しでもよい状態で保存するにはどうしたらよいか、ということは常に於菟の脳裏にあった。実は於菟の台湾の住居にあった鷗外の遺物は、於菟のその後の疎開、終戦、

敗戦後の一時的な台湾大学(前身台北帝国大学)での留用を経て、1953年にやっと日本へ帰ることとなった。現在は文京区立森鷗外記念館に所蔵されている。於菟はこの鷗外の遺物の長い旅について「砂に書かれた記録——鷗外記念館が建つまで——」として記している<sup>35)</sup>。

以下、於菟と父親とのかかわりについて、幾つかの小節に分けて述べる。

#### 4.1. 生涯父親を常に意識した於菟

「すでに古く、幼児から祖母は私(於菟。筆者注)に望を囁して父(鷗外。筆者注)をお手本に激励して学級をどんどん早く進行させた」が、「伯楽にも眼ちがいがあり、父とは異なり私の場合は驚馬に鞭うつようなもので、もともと元気に乏しい青年がますます疲れて来たのである」<sup>36)</sup>という少年時代の於菟があった。そのためであろうか、於菟は「父よりも快活な叔父(篤次郎。筆者注)が親しみ易い」<sup>37)</sup>という。於菟にとって、父親の鷗外はあまりにも偉大だったからであろうか<sup>38)</sup>。「広い世界のあらゆる方面の思想を知りその上時代の青年より進んだ考へも持ち得た父として、かういふ態度であつた心の根底が何であつたか、私など学問も心境もそれまでに到達し得ない者の村度すべき限りでない……」<sup>39)</sup>や、「その父から多くの遺伝質を再現させられて学問だけ八十ないし九十パーセントほど割引された私にいうべきはずがない。」<sup>40)</sup>といった記述が散見される。さらに、「父の名をはずかしめたくないので、己の能力の限界を知った私は文学よりもむしろ基礎医学の研究生生活を選んだ」<sup>41)</sup>。於菟の妻の富貴も「世間では於菟自身の力を認めるよりは鷗外の息子という眼でみられ」、「於菟の随筆集を出すにしてもやはり鷗外ものが中心」と述べている<sup>42)</sup>。

しかし、実は鷗外に比べて於菟の方が素質を持っていたと思われることがある。たとえば、鷗外は数学が苦手で簡単な加算でも単純なミスを犯すことがあった<sup>43)</sup>が、それに対して於菟は数学が得意でしかも好きだったという<sup>44)</sup>。それについて鷗外が「この坊主は赤松のあたまだ」と褒めたことがあるという<sup>45)</sup>。また、鷗外は「碁将棋は全

然知らず五目並べなどで母や私達子供等にもよく負けた」という<sup>46)</sup>。しかし、鷗外は古道具屋で古風な双六盤を買った。この双六盤をもらった峰子はよくこれで於菟達に相手をさせた、という<sup>47)</sup>。

また、於菟の文章力について、於菟の妻の富貴は、於菟の『父親としての森鷗外』(1969)の校正を手伝い、「あとがき」で「於菟の文を読むにつれてその筆力の冴をひしひしと感ずるようになり於菟にとって鷗外の息子であったことが、かえって文学的な才を世間に認められるための妨げになったのではないか」と述べている。さらに、池内(2010: 183)は於菟の『耄碌寸前』の「解説」に「老いをめぐって書かれた古今の文のうち、これはもっとも秀抜な一つにちがいない」と賞賛している。

また、鷗外の遺物を手放さなかったことは、於菟が鷗外を大切に思っていたことの証であろう。於菟は「これらの遺品を戦時又、戦後胸中に包蔵し、あるいは実際に双手にさげて行動した私には一日も平安な時はなかった」と述べている<sup>48)</sup>。それについて、於菟の息子の常治(2013: 8)はとくに「台湾からの引揚げは、日本国家の敗戦という、すべての国家的権威が喪失されたなかでおこなわなければならないという、まさに一個人の選択を超える面があったといえるし、家族の命を守るだけでも精一杯という過酷な状況のなかで、祖父の原稿を放置紛失しないという自ら課した荷の重さは、いかばかりであったろう」と述べており、精一杯だった。

1943年末に於菟は再度台北帝国大学医学部部長に選ばれた<sup>49)</sup>。翌年の1944年3月末に台北帝国大学医学部は大溪に疎開することになり、病院の一部は台北に残り診療を続け、医学部の研究上重要な設備や書類は、士林にある大学付属熱帯医学研究所の裏山に掘ったトンネルにしまいこむことが計画された<sup>50)</sup>。その折、「父から譲られた記念品を入れてやろうという有難い話を研究所技師辻博士が持ってきてくれた」<sup>51)</sup>と、於菟(1969: 324)は述べている。このように、於菟が台湾まで持参してきた鷗外の遺物は戦火を逃れた。士林のトンネルに入れた鷗外の遺物を引き取ったの

は1945年10月頃だが<sup>52)</sup>、日本に送還されたのは1953年9月だった<sup>53)</sup>。期間中の1947年4月25日に於菟は基隆港より日本へ帰国するようになった<sup>54)</sup>。無論於菟が引き上げた1947年当時膨大な量の鷗外の遺物を同送することはできなかった。於菟はそれらを後日日本に送還するようにと、友人杜聡明氏<sup>55)</sup>に依頼した。また、保管する場所としては台北市東門町にあった於菟の旧居を指定した。その住居には、於菟の帰国後元助手だった蔡錫圭氏<sup>56)</sup>が入った。鷗外の遺物の日本への返還は、杜、蔡両氏の多大な尽力があつてこそ実現できたのである<sup>57)</sup>。その返還の経緯について於菟夫婦は著書などで何回も触れている<sup>58)</sup>。

蔡錫圭氏は2013年3月22日に、台湾大学で恩師の於菟について講演をした<sup>59)</sup>。93歳であった。この講演については日本でも紹介された<sup>60)</sup>。一方、台湾の大手の新聞紙である『中央日報』と『聯合報』は1953年1月10日に鷗外の遺物が日本へ返還されることを報道したが、鷗外が台北帝国大学医学部の教授だったなど鷗外と於菟を間違えた内容が混ざっている。また、新井(2014)による、これらの遺物が「台湾に13年もあった」ことや、「1952年に日本に無事届いた」などの記述も間違っている。

なお、筆者が2016年4月上旬に台湾最高の研究機構である中央研究院の「台湾総督府職員録系統」を利用して、於菟に記念品の保管を申し出た「(熱帯医学)研究所技師辻博士」を調べてみたが、熱帯医学研究所に辻という名前の技師は見当たらなかった。

ちなみに、当時の熱帯医学研究所は戦後「梅莊」(写真は文末「付録」参照)という軍区となり、蒋介石の士林旧居はそのすぐ隣にある<sup>61)</sup>。

鷗外の遺物には、手紙、葉書、写真の他、デスマスク、双六盤、文机、馬の置物、ビール杯、紙きりナイフ、勲章などがある<sup>62)</sup>。他に、日本に送る荷物に入れることができなかった、「賓和閣」<sup>63)</sup>という於菟にとって特別な記憶がまつわる額もある。於菟がはじめて鷗外にこの額を見せてもらったのは明治末年のことであった。「この家でお客さんが仲良くする」という意味で、「うちの

ものは終始けんかしているから丁度好い」と鷗外に教わった。その日は、「父が私と顔を見合せ親子らしい会話をせずに過した十余年が一瞬夢であったかとも私も思い、父もおそらくそう感じていたと思う」記念すべき日になったと於菟が述べている<sup>64</sup>。この額は他の遺物と共に日本に送ることができなかったが、幸いその数ヵ月後、蔡錫圭氏の願いで渡米した台湾の女医哈氏<sup>65</sup>が、東大で研究していた夫を訪ねるついでに於菟の自宅に持ってきた<sup>66</sup>。

#### 4.2. 森鷗外・於菟親子の中国・台湾とのつながり

鷗外・於菟が活躍した時代の日本は、周辺にある中国や台湾と強く連動していた。鷗外は軍医として中国、台湾に進出したことがある<sup>67</sup>。とくに、1895年に台湾が日本の植民地となった際、鷗外は近衛師団の軍医<sup>68</sup>として台湾に上陸した<sup>69</sup>。同年6月17日に鷗外は現地における医療上の最高責任者である台湾総督府衛生総務部長となり、早速衛生委員会の設置開催、兵舎の巡視などを実施した。日本が台湾に上陸した1895年を背景とした台湾映画『一八九五』(2008)に、鷗外の役も出てくる<sup>70</sup>。しかし、鷗外の台湾滞在は極めて短く、9月には日本本土における陸軍軍医学校の校長に就任するため、東京に戻った。

一方、於菟は前にも述べたように十年あまりも台湾で医学部の教授として暮らしていた。於菟が漢籍を除いた中華系の物事との初めての接触は、恐らく父親が食べに連れて行った中華料理であろう。当時十歳未満と思われた於菟が後に「初めて食べた支那料理の美味しかった事、子皿に盛ったのが幾種類ともなく出てくるのに驚嘆した記憶が後まで残っている」と述べている<sup>71</sup>。

また、鷗外が於菟に与えた最初の愛の記憶は「明治二十八年一時台湾総督府の軍医部長となつて台湾に転じ、九月に東京に帰つて……。戦争から帰つた父に連れられて上野の竹の台にその頃あつた商品陳列所といふのに行つた。何でも欲しいものをいへと父がいふ。かなりの大きさの軍艦富士の模型を望んだのを父が却つて大変喜んで買つてくれた。いつしよに人力車に乗つて帰つたの

が私が父から受けた最初の愛の記憶となつてゐる。』<sup>72</sup>、とのことである。

小さい頃の於菟は恐らく、自分が不惑の年を越えた年になって台湾に行くとは思わなかっただろう。しかし台北帝国大学に赴任した於菟は台湾の医学教育に多大な貢献をした<sup>73</sup>。また、台北帝国大学医学部同窓会「東寧会」の、命名をはじめとし、運営にも大きく力を注いだ<sup>74</sup>。

前にも触れたが、於菟は2回も台北帝国大学医学部長に選ばれたことがある。2回目の当選について、息子の常治(2013: 102-103)は、教授たちの間に、医療衛生分野で最高指令官、しかも明治天皇の御好誼も背景にあった鷗外を父とする於菟を学部長にしたら、医学部を軍部の横暴から守れるのではないか、という隠れた動機があった、という仮説を立てている。いずれにせよ、台北帝国大学医学部の最後の学部長として、於菟は人の倍以上の苦勞をしてきたと考えられよう。敗戦後、医学部に戻って「部長室」の荷物を片付けていたら、扉を半分あけていた部屋の外から「部長、死ぬんじゃありませんよ。こんなばかな責任をとるんじゃありませんよ。」と若い日本人教授の声がしたという。於菟が自殺でもするのではと心配して親切心から発した言葉だったそうだ<sup>75</sup>。

ところで、もし前記常治の於菟が医学部長として選ばれた仮説が本当だとしたら、鷗外はこういう形で於菟、さらに台北帝国大学医学部の被害を少なくし、また、そのお蔭で於菟は鷗外の遺物も守れた、ということになる。

台湾在住中、於菟は住所を何回か移った。於菟の妻富貴(1969: 356)は「私どもは台北に骨を埋める覚悟で官舎に入らず、住居も自分のものを手に入れたのでした」と述べている。まず、1936年2月21日の『台湾日日新報』に「森於菟氏(医学部教授) 市内東門町一五八(文化村四條通)へと居」<sup>76</sup>とあるが、前述した観潮楼が全焼した連絡が入った(1937年8月)寓所は「台北市樺山町」<sup>77</sup>であった。この「樺山町での住居は比較的短期で終わり、二軒目の住居であるやや南西の東門町へと越すことになった。さらには、三軒目への移転もあった。そこは同じ東門町でも、大学

医学部キャンパスから東へと伸びている大通りを隔てた東門北四条にあり、そこには戦後まで居住することになった。」と、息子の常治 (2013: 23-24) が述べている。この「東門北四条」という於菟家が、台湾で最後の住居、つまり蔡錫圭氏が住むようになった場所で、鷗外の遺物が一時保管された場所にもあたると思われる。新井 (2014) はその場所は現在の杭州南路だと指摘している。この場所は2004年に常治 (2013: 24) が台湾に来た時に見たところ、「大学所有の不動産として、まさにぼろぼろの廃屋の姿で残っていた。」という。台湾大学の名簿により、2012年には蔡錫圭氏の住居が杭州南路にあったことが確認できた。しかし、その後台湾大学の名簿が印刷されなくなったため、蔡錫圭氏が現在もその場所に住んでいるかは不明である。また、その住居が於菟の旧居であったかどうかも分からない。ただ、2016年に筆者がその住所を確認したところ、7階建ての建物となっていた。もし、ここに於菟や蔡錫圭氏が住んだ住居があったのだとすれば、2004年に常治が「ぼろぼろの廃屋」と記したものは取り壊され、新しい建物が作られたことになる (写真は文末「付録」)。

また、常治が2004年に台湾に来たのは、同年12月18日に森於菟教授の胸像が台湾大学医学部により設置された際の式典に招待されたからである。王 (2011: 32) の調査で、その像に刻印された「森於菟先生略歴」に「森鷗外」の誤植が見付かった。2016年4月、筆者が改めて確認したところ、胸像は「森鷗外」と修正され、当大学の「景福館」の一階に置かれている (写真は文末「付録」)。

ちなみに、於菟は1958年に台湾医学会の講演に招かれた<sup>78)</sup>。また、於菟 (1969: 322) は息子が5人とも台湾に関係がある<sup>79)</sup>。さらに、於菟の五男常治は2013年に『台湾の森於菟』を出版している。

## 5. 終わりに

日本と台湾の間では、1世紀も前から医学を含むいろいろな面で密接な交流が行われている。本

稿でとりあげた鷗外の長男於菟は、台北帝国大学の医学部部長を2度もつとめ、台湾における医学教育や研究の成果についても多数紹介されている。それに対して本稿はあまり知られていない、森於菟の台湾とのかかわりを中心に述べてきた。生涯父親を深く愛し続けていた於菟は、小さい頃からの思い出が満ちた鷗外の遺物を台湾まで持ち運び、終戦後はそれらを万難を排して日本へ持ち帰り、鷗外記念館に保管に力をつくした。現在われわれが文豪鷗外の遺物をいつでも観覧できるのは、於菟のお蔭だといえよう。しかし、於菟一人の努力ではなく、台湾人の協力があってこそそれが実現できたのである。もちろん、台湾人が於菟に協力的だったのは於菟が日頃台湾人と好誼を築いていたからであろう。本研究が於菟の人物史を通して日台双方向の国際理解を深める役割を果たすことになれば幸いである。

## 謝 辞

本研究における資料の整理に関して台湾大学の李友仁氏と台湾科技大学の葉珊氏にご協力いただいた。李、葉両氏に感謝の意を表したい。

## 注

- 1) たとえば、加賀大学 (2015) は、日本を取り巻く状況を歴史的な国際環境との関係の中で認識し理解しようとする姿勢は、日本人にとって不可欠のものだとし、雨森芳洲という人物史に関する教案を示している。加賀大学 (2015: 143-144) は近世の日朝関係について大局的に理解し、幕府、李氏朝鮮、対馬藩の複数の視点から歴史を考察することで歴史的事象への理解が深まり、歴史像を総体として再構成する、というような歴史の授業を組み立てている。加賀大学 (2015: 144) はこうした学習の積み重ねを通して、日本と他国と双方向の異文化理解への意識が高まると、主張している。
- 2) 台湾では1895~1945年の日本統治時代を「日治」(日本による統治)と称することがある (2013年7月23日「台湾、日本統治「占領」表記に」『日本経済新聞』)。
- 3) 『左伝』宣公四年「楚人謂乳穀，謂虎於菟」。
- 4) 森 (1969: 99)。
- 5) 森 (1955: 202)。
- 6) 森於菟が台湾における医学教育や研究の成果につ

- いて哈 (2000), 森 (2008) が詳しい。
- 7) 次男不律 (1907-1908) は百日咳で夭逝した (森 (1969: 296), 森著・呉訳 (2013: 25))。
  - 8) 森 (1956: 38) に「兄は大正五年十一月に林美代と結婚したが、まもなく離婚になった。」とある。
  - 9) 「(鷗外が) 二十年前郷里島根県津和野町を出てから初めて、森家の一族が同じ屋根の下に住むこととなった。」 (森 (1969: 281))。
  - 10) 森 (1969: 222)。
  - 11) 森 (1969: 282)。
  - 12) 森 (1955: 205)。
  - 13) 「観潮楼始末記」によると、観潮楼の落成は1892年で、於菟が家に帰ったのはその次の年頃であるという。また、於菟の異腹の妹の茉莉も茉莉の目から見る観潮楼について『父親の帽子』で述べている。
  - 14) 森 (1969: 282)。
  - 15) たとえば森 (1969: 89) に「(志げは) 祖母との間に性格の不調和が年ごとに積り行き」とある。鷗外が1909年に発表した小説『半日』は彼自分の家庭の不和を素材として描かれている作品だと言われている。ちなみに、『半日』の原稿は文京区立森鷗外記念館に所蔵。
  - 16) 森 (2010: 71)。また、森 (1969: 89-90) に「私 (於菟) と母との間の感情もしっくりしなかった。」などがある。
  - 17) 1918年に結婚。
  - 18) 森 (1969: 91-93)。池内 (2010: 179-180) にも。
  - 19) 当時の鷗外はすでに衰弱が著しいうえ、志げに遠慮したため、於菟らを港 (神戸) まで見送りに行くことはできなかったが、代わりに於菟の友人で、鷗外にも愛された虫明久平氏に神戸まで行ってもらったという (森 (1969: 270-271))。
  - 20) 於菟はベルリンでおじの小金井 (鷗外の妹の夫) からの連絡を受けた (森 (1969: 271))。
  - 21) 森 (1955: 28-29)。
  - 22) 1936年2月15日と翌日の『台湾日日新報』に「森博士東京を出発」と「多士済々のお客で 賑はった高千穂丸 きのふ基隆に入港」の記事 (ともに於菟夫婦と子供3人の写真入り) があった。
  - 23) 1936年4月25日「森於菟母堂逝」『台湾日日新報』。
  - 24) 森 (1969: 318-319)。また、観潮楼は戦時中 (1945年1月) にも空襲に遭い、ひどい被害を受けた (森 (1969: 322-333))。
  - 25) 鷗外研究者として知られる吉野俊彦氏の発言 (1986.12.5「複雑な家庭に責任と思いやり」『読売新聞』) である。
  - 26) 鷗外の妹の夫で、於菟のおじでもある。
  - 27) 於菟の息子常治 (2013: 19-20) によると、「於菟の台湾移住は彼のまったくの自由意志のもとでおこなわれたわけではなく、上司からの要請によるものでもあった」という。常治 (2013: 20) が述べた上司には法医学の三田貞則教授も含まれる。しかしこれは「三田定則」の間違いだと思われる。
  - 28) 森 (2013: 14)。
  - 29) 池内 (2010: 180)。
  - 30) 森 (1969: 350)。
  - 31) 森 (1969: 300)。
  - 32) 森 (1969: 292-293)。
  - 33) その中の1箱は紛失した (森 (1969: 301))。
  - 34) 森 (1969: 324)。
  - 35) 森 (1969) に収録されている。
  - 36) 森 (1969: 241)。
  - 37) 篤次郎のことである。森 (1955: 188)。
  - 38) 森 (2010: 3)。
  - 39) 森 (1955: 206)。
  - 40) 森 (2010: 125)。
  - 41) 森 (2010: 7)。
  - 42) 森 (1969: 348)。さらに「(東大の) 教室では小金井教授の姪と、いつも頭に覆いかぶさっているという悩みがあり……」とも述べている。また、於菟の弟類にも鷗外に対して似たような思いを抱いていたようだ (文京区立森鷗外記念館 [http://moriogai-kinenkan.jp/modules/event/?smode=Daily&action=View&event\\_id=0000000346](http://moriogai-kinenkan.jp/modules/event/?smode=Daily&action=View&event_id=0000000346) (2016.4.7閲覧))。
  - 43) 森 (1969: 255)。
  - 44) 金子 (1992: 264)。
  - 45) 森 (1969: 255)。
  - 46) 森 (1969: 255)。
  - 47) 森 (1969: 255)。
  - 48) 森 (1969: 299-300)。
  - 49) 森 (1969: 323)。
  - 50) 森 (1969: 323-324)。
  - 51) ここの研究所は熱帯医学研究所である。
  - 52) 森 (1969: 328) には「昭和二十年 (一九四七)」とあるが、1945年の間違いだと思われる。
  - 53) 森 (1969: 331)。
  - 54) 森 (1969: 328)。
  - 55) 台北帝国大学医学部唯一の台湾人教授であった。
  - 56) 蔡口述・盧整理 (2012.8: 4)。
  - 57) 森 (1969: 328)。また、蔡口述・盧整理 (2012.8: 4) によると、鷗外の遺物は八畳の部屋二間にびっしりと入っており、一年に2、3回ほど曝書するようと於菟に頼まれたという。
  - 58) 森 (1969) など。
  - 59) ちなみに、2016年3月に、台湾大学医学部付属病院に勤めている医師である友人が、先日蔡錫主教授を見掛けたと、教えてくれた。
  - 60) 与那原 (2014)。
  - 61) 2012年9月24日「憲兵梅莊營區 獨享蟬鳴流水幽境」『青年日報』。また、軍の正式なホームページではないが、「中華民國後備憲兵論壇」に「梅莊の歴史」が掲載されている。

- 62) 森 (2013: 208). その中の双六盤は鷗外が母(峰子)と妻(志げ)との仲をやわらげるために買ったものであるという(森(1969: 311)). 森著; 呉訳 (2013: 30)に出ているのもこれだろう.
- 63) 最初の文字は「大」の下に「貝」だという(森(1969: 307)).
- 64) 森 (1969: 306-307).
- 65) 案ずるに, この女医哈氏は哈鴻潜氏の妻かと思われる. 哈鴻潜氏は1924年に中国東北のハルビンで生まれ, ハルビン医科大学で日本人教師の戸井田登氏, 照井精任氏に学んでいた. 1946年に長春大学医学部解剖学科で助手をつとめた時, 同科に瀧津久次郎氏と垣山六二氏も在籍していた. 1948年に哈鴻潜氏は台湾大学医学部解剖学科に移り, 金關丈夫氏の指導を受け, 1953年に講師となった. 1955年前後東京大学解剖学教室(小川鼎三教授)で5年ほど研究していた. 期間中に九州大学医学博士号を取得した. 1959年にアメリカに行き, 1970年代より研究・教学など台湾大学をはじめとし, 幾つかの大学の医学部と深くかかわっていた(陳(2010)).
- 66) 森 (1969: 332).
- 67) が, そこら辺のことについて意外とあまり知られていないようだ(新井(2014)). また, 高(2010)によると, 中国大陸では鷗外の文学もあまり知られていないようだ.
- 68) 森 (2013: 27).
- 69) 当時台湾支配の指揮にあたった近衛師団長は北白川宮能久親王であった. 北白川宮能久親王は1895年10月末に台湾で薨去した. 後, 鷗外により『能久親王年譜』が完成された.
- 70) 2008年に上映, 2009年にDVD発売.
- 71) 森 (1955: 190).
- 72) 森 (1955: 187-188).
- 73) 蔡口述; 盧整理 (2012.8), 王 (2011) など.
- 74) 森 (2013: 180-194).
- 75) 森 (1969: 327).
- 76) また, 森 (1969: 318)にも「台北内東門町四条通りに入って間もなく, 四月十八日に, 母の病死の報を得」とある.
- 77) 森 (1969: 318). 森 (2013: 22)は「台湾へ移住した森一家はまず樺山町の民家へ落ち着いた。」と述べている.
- 78) 蔡口述・盧整理 (2012.8: 5).
- 79) 上の二人は大学の医学部を出て医者となり, 長男真章は台大を出て戦時中軍医となり, 次男富は東北大出身で, 内地勤務が主であったが台湾にも来た. 三男は東大理学部を卒業したが小学校の途中から高校卒業までを台湾で過した. 下の二人は台湾が戦場になろうとした頃中学生だった.

## 参考文献

### 日本語

- 森鷗外. 能久親王年譜. 1980(青空文庫 [http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/46332\\_30636.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/46332_30636.html)) (2016.4.4閲覧)
- 森鷗外. 半日. 1909(青空文庫 [http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/53026\\_48141.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/53026_48141.html)) (2016.4.4閲覧)
- 森於菟. 観潮楼物語(上)(中)(下). 台湾時報 1943.1~1943.3
- 森於菟. 父親としての森鷗外. 東京: 大雅新書; 1955
- 森類. 鷗外の子供たち. 東京: 光文社; 1956
- 森於菟. 父親としての森鷗外. 東京: 筑摩書房; 1969. pp. 347-351
- 複雑な家庭に責任と思いやり(連載). 読売新聞 1986(ヨミダス歴史館 <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)
- 金子幸代. 鷗外と〈女性〉. 東京: 大東出版社; 1992
- 森於菟著・池内紀解説. 耄碌寸前. 東京: みすず書房; 2010
- 森常治. 台湾の森於菟. 東京: MP ミヤオビパブリッシング; 2013
- 台湾、日本統治「占領」表記に. 日本経済新聞 2013 ([http://www.nikkei.com/article/DGXNASGM23049\\_T20C13A7FF2000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASGM23049_T20C13A7FF2000/)) (2016.8.5閲覧)
- 与那原恵. 94歳の教え子蔡錫圭が語る、「私の恩師は森於菟と金関丈夫」日台医学の交流秘話。(特集 台湾我來了! 東京人的台湾散歩). 東京人 2014; 29(9): 70-77
- 文京区立本郷図書館鷗外記念室. 写真でたどる森鷗外の生涯—誕生140周年記念—. 東京: 文京区立本郷図書館鷗外記念室; 2016
- 哈鴻潜. 台湾解剖学史—森於菟と金関丈夫両先生を中心に. 日本医史学雑誌 2000; 46(3): 307-309
- 森千里. 森於菟が台湾に残した解剖学の足跡. 解剖学雑誌 2008; 83(4): 117-121
- 加賀大学. 人物史学習を通じた双方向の国際理解教育の構築に向けて—主学習「雨森芳洲と朝鮮通信使」—. 神奈川大学心理・教育研究論集 2015; 37: 141-145
- 大辞林(第三版) (<http://dic.yahoo.co.jp/>) (2016.3.20閲覧)
- デジタル版 日本人名大辞典 + Plus (<http://dic.yahoo.co.jp/>) (2016.3.20閲覧)
- 日本大百科全書 (<http://dic.yahoo.co.jp/>) (2016.3.20閲覧)
- 文京区立森鷗外記念館 (<http://moriogai-kinenkan.jp/>) (2016.3.20閲覧)
- ### 中国語
- 左丘明・国立台湾師範大学編集. 左伝. 台北: 国立台湾師範大学; 2012
- 森鷗外博士珍藏 我方歸還日本 日人深感欣喜. 聯合報 1953(聯合知識庫—全文報紙資料庫 <http://udndata>).



com/library/)

日森鷗外博士遺物 我醫界決歸還 日文學界感到欣喜。  
中央日報 1953 (中央日報全文影像資料庫  
<http://140.112.113.22/cnnewsapp/start.htm>)

行政院客家委員會, 一八九五。台北：新鶴鳴；2009  
高慧勤編選。森鷗外精選集。北京：北京燕山出版社；  
2010

陳必誠。哈鴻潛教授追思會 哈鴻潛教授生平事略。  
2010 ([http://www.cmu.edu.tw/news\\_detail.php?id=1226](http://www.cmu.edu.tw/news_detail.php?id=1226))  
(2016.4.4 閱覽)

王敏東。影響臺灣醫學的日本人 日治時期各科之領導者。  
台北：橋井文化；2011

梅莊的歷史。中華民國後備憲兵論壇, 2011 (<http://www.rocmp.org/viewthread.php?tid=33163>) (2016.4.4 閱覽)

蔡錫圭口述・盧國賢整理。台灣解剖學發展推手。景福  
醫訊 2012, ([http://www.jingfu.org.tw/doc/jff\\_mgz\\_m29-08.pdf?P\\_MID=MGZ102005008](http://www.jingfu.org.tw/doc/jff_mgz_m29-08.pdf?P_MID=MGZ102005008)) (2016.4.7 閱覽)

吳柏毅。憲兵梅莊營區 獨享蟬鳴流水幽境。青年日報  
2012 (<http://news.gpwb.gov.tw/news.aspx?ydn=026dTH>)

GgTRNpmRFEgxcbfcCSN9Fhd8KFbqLRgMWauV9ZQSf  
BW0wU3G517A%2bWaTs4qErw4Chqdn6ZOWqBINBy  
WJae4JGLPNxc3251AD%2bd62Y%3d) (2016.4.3 閱覽)

森茉莉作・吳季倫譯。父親的帽子。台北：野人文化；  
2013

蔡錫圭。永懷師恩—談森於菟教授 (1889—1967), 金關  
丈夫教授 (1897—1983)。2013 (<http://www.lib.ntu.edu.tw/node/1591>) (2016.3.20 閱覽)

新井一二三。森鷗外家族與台灣。UDN 名人堂電子報  
2014；348 (<http://paper.udn.com/udnpaper/PID0030/252978/web/>) (2016.3.20 閱覽)

連子慧。臺大醫學院其前身與近代日本文學家族之淵緣。  
臺大健康電子報 2015；91 ([http://epaper.ntuh.gov.tw/health/201506/story\\_5.html](http://epaper.ntuh.gov.tw/health/201506/story_5.html)) (2016.3.20 閱覽)

中央研究院台灣史研究所台灣總督府職員錄系統 (<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action?viewer.xyear=1896>)  
(2016.4.3 閱覽)

臺灣百年時空歷史知識庫 (<http://140.112.113.3/Abouttaiwan/>) (2016.4.2 閱覽)

## 付 録 (いずれも 2016 年 4 月撮影)



「梅莊」



杭州南路



「森於菟先生像」

## Otto, the Eldest Son of Mori Ōgai, and His Linkage with Taiwan

WANG Ming-tung

Department of Applied Foreign Languages, National Taiwan University of Science and Technology

Otto was the eldest son of the famous writer Mori Ōgai, and was named by his father after the “tiger” in *Saden*. Owing to the fame by his father, Otto selected medicine as his career, and graduated from the Tokyo Imperial University College of Medicine in 1913 and studied in Germany until the spring of 1922, when his father passed away. Otto then made an important choice for his life; moving to Taiwan to be a full professor of anatomy at Tihoku Imperial University. Otto took a lot of relics of Mori Ōgai with him to Taiwan in 1936, thereby avoiding possible damage from the fire that occurred in his old house in the next year. After World War II, Otto stayed for a short period in Taiwan and then was moved back Japan in 1947. With the help of his former assistant, all the relics of Mori Ōgai were sent back to Japan in 1953. Because of the substantial contributions of Otto, the National Taiwan University College of Medicine made a bronze statue for him.

**Key words:** relics of Mori Ōgai, Taiwan, Mori Otto